

アスパラガス（普通、立莖）

栽培暦

作型	年次	月	1 ~ 2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 ~ 12
露地普通	初年度	は種					定植					
	2年目						収穫					
	3年目以降											
雨除け 立莖栽培	初年度											
	2年目以降											

栽培の特徴とポイント

定植して 10 年以上安定的に収穫するには、定植時の徹底した土づくりが重要である。

露地普通栽培では、茎枯病の耕種的防除及び薬剤防除の徹底が収量の安定及び収穫年数の延長を図るポイントとなる。雨除けは茎枯病の確実な防止効果があり、立莖栽培と合わせて 1 t 以上の多収穫を狙える栽培方法である。ただし、初期投資がかかること、雨除け内が高温乾燥となりスリップスが多発しやすいこと、夏期に障害茎が発生しやすいこと等に対する対策が必要である。

品 種

メリーワシントン 500W : 萌芽勢はさほど強くないが、比較的病害に強く、安定した品種である。

(固定種)

スーパー・ウェルカム : 萌芽勢が強く豊産性であるが、収穫しすぎると急に萌芽しなくなり、土壤病害の発生や株絶えとなりやすい。このため、露地普通栽培では収穫の打ち切り時期に注意が必要である。

育苗管理

1 播 種

1) 時 期

次年度から収穫を上げるために、ハウス内の温床で 2 月上旬に播種すると生育量が確保できる。4 月以降に播種する場合は、無加温でもよいが、生育量がとれないことから、翌年は露地普通栽培では収穫しないか収穫期間を短くし、立莖栽培では茎葉が一定量確保できてから収穫を開始する。

2) 播種床の準備

安全を考慮して床土は園芸用育苗床土を用いる。育苗床は園芸用育苗箱や水稻育苗箱を利用する。

3) 種子準備と播種

10 a 当たり 1 dl 程度の種子を用意し、3 ~ 4 日間水に浸漬してから、2 × 4 cm 程度に条まきする。

2 育苗管理

加温装置やトンネル等を使用して温度を日中 25 度、夜温 12 度以上を確保する。かん水は床土の上が乾かない程度とする。

3 鉢上げ

茎が 2 ~ 3 本伸び、擬葉が展葉する前に鉢上げを行う。ポットは 3 寸、用土は消毒した田土 1 m³ を準備し、表の肥料を均一に混合する。p H 6.5、E C 0.4 ~ 0.6 を基準とする。田土 1 m³ で本ぼ 20 a 分の苗の用土となる。

(kg/田土 1 m ³)	
肥料名	施肥量
完熟堆肥	2 0 0
苦土石灰	1 . 5
過磷酸石灰	0 . 5
化成肥料	1 . 0

4 鉢上げ後の管理

育苗期間が3ヶ月以上あるので、適宜液肥をかん水代わりに施用する。化成肥料として基肥一発肥料を使用したら追肥はいらぬ省力的である。定植が近づいたら、しおれない程度にかん水を控えて、ほ場へ出す準備をする。

本ぼ管理

1 ほ場の選定

アスパラガスの根は1m以上伸びるので、この根を十分に張らせることがその後の生育収量に大きく影響する。このため、肥沃でできるだけ作土があり、排水のよいほ場を選ぶ。

2 堆肥散布及び深耕

全層に施用する分の堆肥や肥料を散布し、深耕ローター等ができるだけ深く耕起する。次に定植畝となる部分を管理機等ができるだけ深く割り返し、溝施用分の堆肥や肥料を割返した溝に施用し、再度耕起して埋め戻す。

3 施肥

定植時の施肥基準 (kg/10アール)

肥料名	総量	基肥		成分量		
		全層	植え溝	N	P	K
完熟堆肥	10t	6t	4t			
苦土石灰	180	120	60			
熔燐	120	60	60		24.0	
有機肥料	80	80		4.8	4.8	4.8
基肥一発肥料	60	60		8.4	8.4	8.4
合計				13.2	37.2	13.2

定植年の生育後半に肥切れの兆候がある場合は、ポリマルチをしていることから、液肥10倍液100cc/株を灌注機で1~2回土中に追肥する。
有機肥料：フワリ-有機
基肥一発肥料：果さい一発

2年目以降の施肥基準 (kg/10アール)

肥料名	総量	基肥	追肥		成分量		
			1回目	2回目	N	P	K
完熟堆肥	3t	3t					
苦土石灰	100	100					
熔燐	60	60			12.0		
フワリ-有機	200	80	60	60	12.0	12.0	12.0
果さい一発	120	45	45	30	16.8	16.8	16.8
合計					28.8	40.8	28.8

追肥1回目
融雪後

追肥2回目
収穫打切前

4 雨除け施設の設置

立莖栽培する場合は、パイプハウスとするか、図のような簡易な雨除け施設を設置する。

5 定植

1) 定植時期

6月(ポットに根が回り過ぎない内に定植する。)

2) 栽植方法

畝幅 2.0~2.1m × 株間 30~40cm × 1条植え
= 1,200~1,500 株/10a

畝幅は2m以上とった方が生育中の管理作業がやりやすい。

3) 畝立て、マルチング

ほ場の排水性に応じて 25cm 以上の高さの畝を作

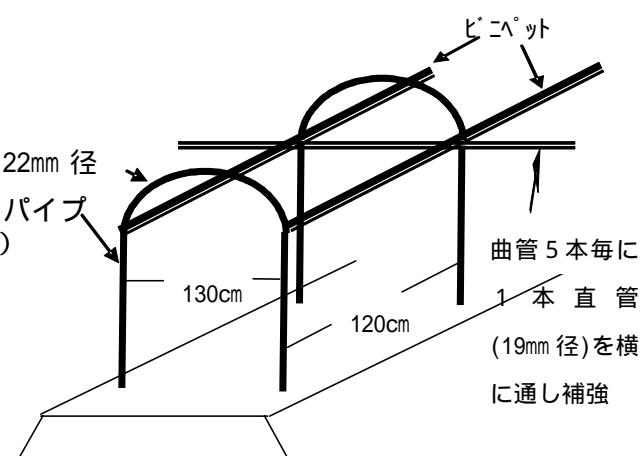


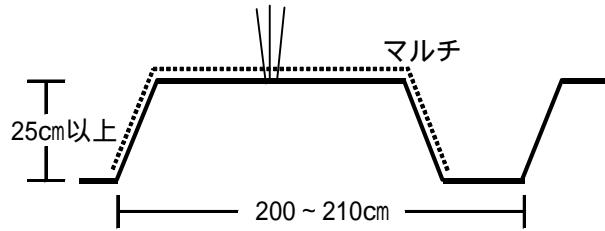
図 簡易雨除け施設の構造

り定植年だけは、除草の省力化や乾燥防止のため黒ポリでマルチする。排水溝をきちんと作り、畝溝をしっかりつないでおく。

6 茎葉の管理

1)倒伏防止

株の両側に3~4段に紐を張り、株が倒伏しないようにする。露地普通栽培では畝上に4~5m間隔でアーチパイプを設置して紐を張るとよい。



2)適正な茎葉量の維持

L規格の小さめまたはM規格の大きめの茎を株当たり4~6本(1m当たり15~20本)仕立て、過繁茂にならないように細茎や障害茎を間引いて管理する。

3)摘心

茎葉が伸び過ぎると倒伏しやすくなることから、140~160cm程度で先を摘み取る。これ以下だと側枝が伸びすぎること、繁茂量が足りなくなること等から140cm以下とはしない。

4)下葉の刈り取り

立茎栽培では、茎葉が繁茂してくると株元が暗くなり、収穫茎の緑色が薄くなるので、株元に光が当たるように、生育中期に1~2回、日陰を作る下葉を右図のように切除する。

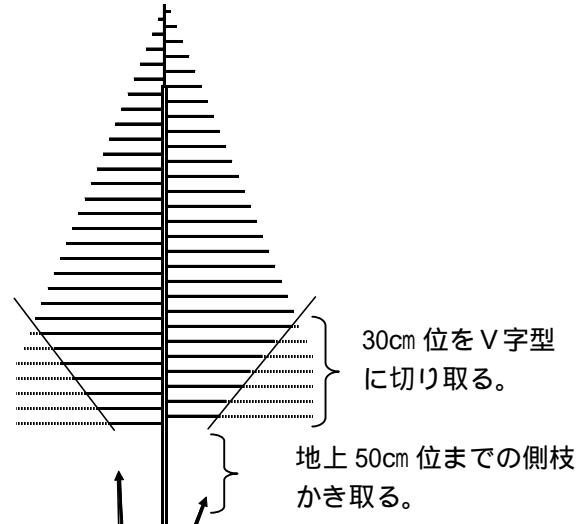


図 下葉刈り取りのイメージ

7 乾燥、高温対策

晴天が続きほ場が乾燥したら3~5日に1回の割合で積極的に畝間かん水する。また、パイプハウスでの栽培では、夏期の高温で呼吸量が多くなり、萌芽してくる若茎の頂部が収穫前に開いたり、内部が空洞になり曲がったりするものが多くなる。そのため、ハウスを遮光資材で被覆したり、石灰乳をハウスビニールの表面に散布する等でハウス内気温を下げるようとする。

8 茎葉刈り取りと残渣処理

11~12月となって茎葉が黄変してから草刈り機で茎元からできるだけ茎を残さないように刈り取り、ほ場外へ搬出して焼却する。定植年のマルチは野鼠の越冬地にならないよう、降雪前には取り除く。また、残渣が残っていると翌年の病害の原因になるので、処分する。残った株の内部でも病原菌が越冬するので、翌春の萌芽前までにバーナーで株元を中心に畝の上を焼却する。

病害虫防除

茎枯病：前年茎で越冬し、春先の萌芽時に感染し、生長に伴って蔓延する。雨除けすることで発生はほぼ防げるが、露地では秋の刈り取り茎をほ場から搬出し、焼却すること、堆肥で地表面を覆うこと等の耕種的防除に合わせ、萌芽時を中心に降雨時の薬剤防除の徹底が重要である。

スリップス：雨除けした場合に茎葉が高温、乾燥となることから発生が多くなる。発生も露地より早くなることから、5月下旬頃から叩き落とし調査で発生量を確認しながら、発生密度が高くなる前に薬剤防除を徹底する。

疫病、株腐病：いずれも根や地下茎を侵し株絶えの原因となる。ほ場を過湿、過乾にしないことを始め、過度に収穫しないことや茎枯病の防除を徹底して、株を弱らせないことが大切である。

収 穫

萌芽茎が30cm程度の長さになったら地際から切り取り、収穫する。高温期は1日2回収穫する。傷、曲があり等の障害茎を除いて、25cmに切り揃えて規格別に選別し、100g結束やバラ1kg詰め等の荷姿で出荷する。鮮度が落ちやすいので、速やかに予冷する。

露地普通栽培で春どりする場合、5月上旬が収穫のピークでその後漸減するが、収穫打ち切りが遅れないよう、L以上比率：3割以下、1日の収穫量：最高時の3割以下等を目安とする。年次別の収穫日数の目安は右表のとおりである。

立莖栽培の場合は、1~2週間収穫した後に、一旦収穫を打ち切って莖葉を5~6本仕立て、その後、萌芽してくるものを秋になって萌芽しなくなるまで収穫する。株の力がないものは、最初に萌芽した莖をそのまま5~6仕立てから収穫を始めるとよい。

収穫年数	収穫日数
1年目	15~20日間
2年目	20~30日間
3年目以降	50~60日間

販売のポイント

一般には規格別に100gに結束して40束(2Lは35束)をダンボールに詰め、市場へ出荷するが、保冷パックに1kgバラ詰めとして贈答用に直売すると付加価値販売が可能である。立莖栽培では販売期間が長期にわたることから確実な販路確保が大切である。